

## 服装史より

——流行の変遷を裏付けるもの——

山本登美子

服装は、その時代の社会状況の微妙な反影であり、その歴史は、新しい要素を加えつつ常に繰返されているものである。

洋服の成立を顧みると、遠く古代の、布地を体に巻きつけていた時代、今日の洋服の基礎となる形態を整えはじめた中世期、そして貴族を中心として絢爛たる装飾を無際限につみかさねていつた十六世紀から十八世紀等と、服装の歴史はそれぞれの時代の文化的な一面を顕著に示して来ている。また、近時のめまぐるしい流行の変遷は、大時代をかけてゆるやかに変化して来た前世紀までの動きに対して、昨今の社会状況の移行が如何に激しいものであるかと言う事を端的に反映しているものと言えるであろう。

シャルドヌと言うフランスの作家に「幸福だつた日本人は、茶器や屏風にしか絵を描かなかつた」と言う言葉がある。これは、人間の生活面に対する美意識が、その生きる時代の歴史的な力によつて影響されると言う事を意味するものである。彫刻や絵画に見られる古代社会の風俗、特に、ギリシヤ時代の、布地を体に巻きつける

事だけで満足されていた時代の風俗は、何にもまして平和的であり、現代と較べてきわめて非活動的であつた事を思わせる。また、人々が重い衣裳を身につけ、デコラティヴでしかなかつた中世期の風俗、それは同じく非活動的であり平和的であつても、唯布地を巻きつけていただけの古代社会とは異なり、時代が装飾性を求め、一般市民階級が経済力を持ち始めた事を物語つている。これは、ひとり外国の例だけではない。

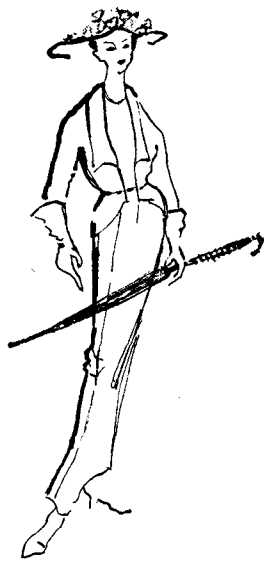
或る意味で、風俗の変遷と言うものは、人間性そのものの歴史として見る事も出来よう。また、文学が時代思潮を表現するものであれば、服飾にみられる發展は時代時代の生活様式を表現しているものと言う事が出来る。

二十世紀に入つて、私たちの歴史は、かつて記録された事のない大事件の連続であつた。それにつれて、芸術も科学も、そしてそれにとまらぬ生活自体もめまぐるしく変化していつた。ちなみに、第二次世界大戦後についてだけ考えてみても、あまりに変遷の激しい時期である。終戦直後の、空白な時期から始まる混乱した精神文化も、当時発芽して日淺かつた化学関係も、数年を見ずして長足の進歩をとげた。勿論、服装がこの時代の風貌に無関係であるはずがない。例の鹿鳴館時代の風俗が、直ちにモンペ文化につながると言う事など、この歴史的な背景の力を考えずには、論理的に解釈出来かねるものなのである。

ここでは、社会の状況に動かされながら、二十世紀に入つてから今日まで、どの様に服飾が變動して来たかをあらまし申べてみようと思う。

二十世紀の初頭は、十九世紀末より受けついでベル型、胴をしめつけて裾をひらいた所謂砂時計型の改良から

始まる。ベル型と言うのは、コルセットでしめつけた蜂の腰の様な胴と、鐘形（ベル）の線を持つスカートの総称で、高いカラーにはレース絹布などを用い、床にまでとどいたスカートの裾には種々の装飾をほどこしたものであつた。（図参照）このベル型のあとに現われたのは、裾を極端に細くした、足枷形のホップル・スタイルである。ホップル型はベル型に比してスカート丈がやや短くなり、かろうじて床にとどくほどのもので、足枷の文字どおり歩く事にも不自由なほどタイトなものであつた。



（上図・ベル型） 平和なそして優雅な時代を反映しているが、如何にも非活動的であつた。  
（下図・ホップル型） 同じ傾向のもと、スリムなシルエットに変化していった。

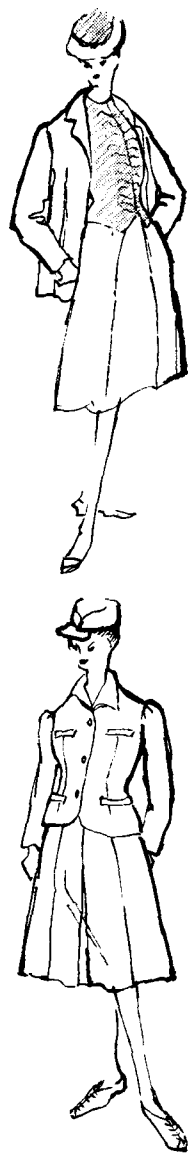
一九一四年、第一次大戦が始まると、勿論こうした不自由なスタイルは時勢によつて改革を加えられた。活動性の要求から、まずスカートが短く切られ、コルセットからの解放がなされた。こうして樽形のシルエットが生まれ、それが筒形に整理されてチューブラー型が作り出された。一九一八年に大戦の幕が閉じられ、それ以後、一九二〇年からの約十年間は、このチューブラー型を基調としての流行が見られた。つまり、ウエストラインを

ひくくしたショールト・スカートの時代に入ったのである。こゝで私たちの考えなければならぬのは、第一次大戦の結果、デコラティヴなものから、合理主義的なものへと変化していった事である。そして、それが単なる合理化と言うものではなく、あくまでも服飾の感性を伴ったものであつた。例えば、樽形のバレル・シエーブが大戦の所産であるとしても、それは数年をへずしてチューブラー型に整理されていつている。



(上図・チューブラー型) 第一次大戦の結果、デコラティヴなものから合理的なものへと変化していった。  
(下図・フロインク・ライン) 次に、合理化から近代化へと進み、女らしさを強調する様になつた。

一九三〇年頃、こうした大戦の遺産である合理主義が、今度は単なるデコラティヴと言う意味だけではなく、人間性の目醒めとして女らしさと言う事が強調される様になつた。第一にウエストがフォーマルな位置をとり、スカートも徐々に長くされ、形態的な問題だけではなく、イヴニングドレスとかカクテルドレス、あるいは街着や郊外着、スポーツ服等のジャンル別の区分がなされる様になつたのである。そして、シルエットとしては、流れる様な近代感覚を持つフロインクライン(流線型)を表現する一方、第二次大戦への予感を思わせるミリタリモードが流行していった。



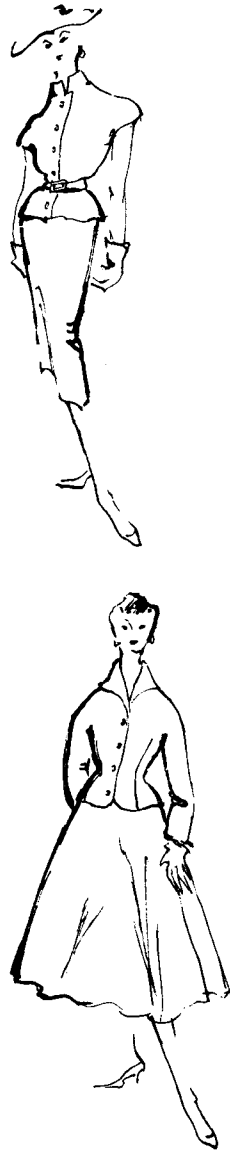
(上図・ミリタリモード) (下) デコラテイブな中にするどい感覚をもち、緊張感をもたせた。  
つゞいて険悪な社会の必然性より、活動的・機能的なものとなつた。

一九四二年に第二次大戦が始まり、一九四五年に終戦、この間、モードと言うほどのものを見ず、シャツウエストのドレスや、スラックス等の実用着が用いられていた。それは、当時の社会状況を考えあわせて当然の事と  
 言えるものであり、また、第一次大戦に較べて、今次大戦が如何に大規模なものであつたかを思わせるものであ  
 る。

以上は、第二次大戦までの婦人服装の推移であるが、戦後は周知の如く参政権の獲得をはじめ、我国婦人の社  
 会的地位に劃期的な変革をみた時代である。先の第一次大戦の場合、我国に対する戦争の直接的な影響も比較的  
 少なく、それに我国独自の社会形態もつだつて、欧米婦人の合理主義への発展も、我国においては一部の婦人  
 によつて啓蒙的なもの、或は遊戯的なものとして受けとられ、一般の婦人には無縁のもの様に考えられたもの  
 であつた。これにひきかえ、直接に影響をあたえた今次大戦によつて、日本の婦人も必然的に活動性を帯び、積  
 極的になつた。従つて衣生活においても、機能的な、しかも自己の個性を生かした美しさを求める様になつたの

も当然であつたらう。

では次に、我国一般婦人にも身近なものとなつた戦後の流行の推移を振り返つてみよう。



(上図・ブロードショルター)

戦争の不安がさめずさんだ世相の反映から、全てが固い感じとなる。

(下図・ロングスカート)

次に、人心の落付かぬ中にも過去への反動として、一部に優雅な線の要求があらわれ始めた。

一九四六年、これは終戦の翌年であるが、ミリタリモードの名残をとどめてブロードショルターと呼ばれる、肩を怒らせたシルエツトが見られ、スカートは短く全てが固い感じのものであつた。但し、この時代は、戦争の不安や食糧不足等で、一般の人は未だ服飾に強い関心を示すに至らず、アメリカ風の原色趣味を迎合するか、あるいはそれに対する反感によつて自己を支える程度の、全く混乱した風俗の時代であつた。

一九四七年、ミリタリズムへの反動としてロマンテイシズムへの傾向が生まれ、女らしさと優雅な線の要求から、ショートなものよりロングスカートが圧倒的に人気を集める様になつた。クリスチャン・ディオールの、所謂ニュー・ルックがこれである。ドレスは勿論、スーツやコートに至るまで、袖には、やわらかなキモノスリー

ウが用いられ、戦後の不安定感を一気にぬぐい去ろうとする気持が感じられたものであった。勿論、我国は全てに新しい方向を示す様になつたと言うのではなく、アメリカの影響から抜けきれずにショルダーパッドを入れた服が大部であつた。

一九四八年、世界を風靡したロングスカートも、スピーディな生活様式とは相容れず、わずかに戦後のすきみに対して「優雅さ」を以つて人間性を主張するだけにとどまつた。その結果、ロングスカートの持つロマンチックな雰囲気は、胴を絞り、腰を張らせた女性本来の魅力的なボディラインを表わすものとして名残をとどめた。この頃から、世情の落つきと共に、フランス・モードがアメリカを経て徐々に浸透して来る様になつた。



(上)

図)

伝統的なフランスモードの表現として、古典に主材した女性的ボディラインの強調がみられる。

(下図・オブリック・ライン)

ロマンティックな甘さに加え、機能美をもつ、シルエット自体の変化をみる様になつた。

一九四九年には、昨年のロマンティックな甘さから更に発展し、合理的な単純化によつて機能的なものへと移

つて来た。勿論、その基調となるものはロマンチズムであり、整理された女性美への型であり、ミリタリズムの残影は全く消えてしまっている。この頃から、我國の服飾界ではパリー・モードを直輸入し、その消化につとめる事が一般化して来たのである。

一九五〇年、前年よりの機能美の表現はますます盛んになり、今までの局部的な表現から発展して、更にシルエット自体の変化を希望する様になつて来た。つまり、モードへの本質的な自覚が始まつたのである。オリック・ライン（斜の線）があらゆるものに用いられ、スカートはシース・スカートが多くなつた。

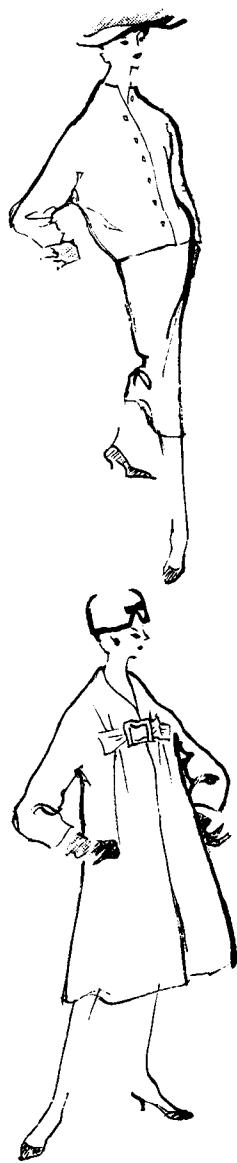
一九五一年になると、機能美の表現はひき続き行われているが、その傾向もやゝ行きづまり状態となり、その打開のためか、古代衣裳から取材したと思われる東洋的な感覚に走り始める。また、スカートも、前年のシース・スカート万能からフルなものの新しい動きも見せている。そして、バロンシャガによつて、はじめて用いられたミデイ・ライン（水兵服のように胸を絞らない真直な線）は、第一次大戦後の様式の再現であり、またそれに馴れた現在では目新しいものではないが、当時としては特筆すべきものであつた。



（上・下図） ルーズ・フィットの再現としてのミッデイ・ラインの出現、加えて東洋的な感覚に走り始める。



一九五二年、ミデイ・ラインの影響をうけたセーター・ラインやカーディガンの線が、機能的な面によつて取りあげられている一方、東洋調は益々旺盛となり、明らかに和服の帯やその上に羽織を着たとみられるシルエツトが多く用いられ、東洋趣味は物珍らしさの程度から脱してヨーロッパ的なものとの完全に近い融合を見せる様になつた。色彩もまた東洋的な配色が用いられるようになって来た。なお、マテリアルについて言つても、今までスポーツ用とされて来たツイード類を、ドレッシイなものに用いられるようになったのも著しい傾向である。



(上図)

オリエンタリズムの強化。

(下図)

胸高のハーフ・ベルトは和服の帯をかたどり、世界の服飾界に流れる。

一九五三年は、東洋調なものだけではなく、フランスによつて代表された欧州的なものからスペインをはじめ近東諸国など、その土地の民族固有のものを取り入れようとする気配が見られた年である。また、一九四七年のロング・スカートによつて認められたディオールが、チュウリップ・ラインを発表してデザイン界の王者としての地位をかためた。チュウリップ・ラインは、胸を極端に丸く張り上げ、ウエストはびつたりと合せ、女性の体

の線の特徴を誇張してみせている。この年の秋には、ディオールショウが我国においても開催され、フランス・モードへの傾倒は頂点に達した感があつた。



(上図・チュウリップ・ライン) 女らしさを強調し、更に誇張してみせた曲線スタイル。

(下図・H ライン) 一転、直線スタイルに移り、注目をあびた。

一九五四年も、矢張りディオールの発表したHラインによつて代表されている。即ち、前年のふくらみを持つたチュウリップ・ラインから一転し、バストを扁平にする事によつて全体をすらりとした垂直線に表現している。女性本来の美しさを押し殺した様なこのシルエットは、鋭い反対を浴びながらも、ディオールの名によつて大勢として受け入れられたものである。

一九五五年の春、ディオールは、Hラインの改良型とみられるAライン(Hラインのボディに裾ひろがりのスカートをつけAの字を形作るもの)を発表し、更に秋にはYラインを発表している。Yラインとは、Y字状に上体のヴォリュームを強調したもので、下半身の線によつてすらりと丈高く見せたものである。我国では、これらアルファベットによつて表わされるシルエットに全く幻惑された形であつたが、しかし、現実にはそれらと対

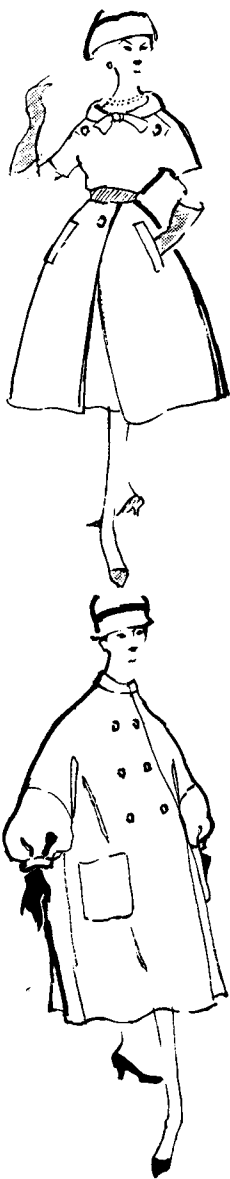
照的な線も同時に用いられていた事も勿論である。特に秋には、今まで何等かの共通点を持っていた各デザイナー達が一達、全然異なつた形式を以つて発表を始め、それがこの年の最も大きな特色であるとも言われたものである。



(上図・Aライン、下図・Yライン) アルファベットによつて表わされるシルエットに幻惑された形であつた。

一九五六年の春には、やはりディオールによつて、アロウ・ライン(細い身体の線で一直線を表わし、その上の袖付線と袖によつて矢尻形の下向の線を作つたもの)が発表され、そして秋には、帽子と肩線とヒップとによつて三つの馬蹄形の磁石を優美に象徴したマグネット・ラインを発表し、モードの王座をやはりディオールが占めたものであつた。しかし、それと平行に、他のデザイナーによつて発表された流動する線の美しさ(フアット)や、曲線を主題とするもの(エイム)などもあり、また十六世紀から十八世紀にかけての宮廷生活によりヒントを得たデザインもみられ、総体に従来より一層やわらかな女性らしさが求められたのである。ちなみに、十六、七世紀と言へば、フランスにおける古典主義時代で、フランス史上最も華やかであつた時代である。これらは、こゝ数年來のデザイン界の傾向で、一部では社会的不安がとなえられているにしろ、平和を希い、より優雅さを

求める世人の声の反映であると考えてよからう。そして、前年あたりより、モードの海外ニュースが、服飾関係者のみならず、一般人の話題としてもいちはやく報道される様になつたのも面白い現象である。



(上図・アローライン)

ようやく女性本来の優美な線へと落付きをとり戻した。

(下図・マグネット・ライン)

従来より一層やわらかい女性らしさがみられ、平和的な服飾界が再現した。

一九五七年の春から夏にかけて発表されたものの共通点は、直線の方法と甘美な主題とである。これはディオールのリバティ・ライン(H・A・Y・アロー・マグネット等と進化して来た幾つかのシルエットを基調とし、線や形にあまり捉われない自由さを持ったもの)にも、また、日本の「うちかけ」にヒントを得たかけものライン(カステイヨ)にも見られる。これに加えて、中国的なスリットや、トルコ風の裾すばましのスカートなども現われ、オリエンタリズムへの傾向も益々深くなつて来ている。

以上、二十世紀に入つてからのモードの主流についてのべて来たが、この一見アンバランスな、そして無秩序なモードの流れも、しかし単なる気まぐれによつて推められて来たものではなく、多少の例外はあるとは言え、

他の文化史がそうであると同様、きわめて必然的な時代の力によつて動かされて来たものである。ここでは、社会状勢を主体とした世界史を中心にモードの動きを見て来たが、流行の原因となるものは、しかし単なる社会状勢のみによるものではない。また、風俗的な流行と言う、広い意味での服飾の流行について考えてみれば、流行への目的のためになされた「意図」そのものよりも、流行の主体がもつと他の面から芽生えて来る場合だつてあるものだ。

最近、今年の秋から冬にかけての新しいシルエツトがデイオールによつて発表されたが、そのリーニュ・フェウゾウ（紡鐘ライン）が秋冬を待たずして発表されると言う、ファッション界の或る現象についても考えてみる必要がある。この、次のシーズンのための発表と言う事については、その行為は流行を形作るうとする事であり、作品は次のシーズンへの予感とか目安と言つたものであると考えられる。こうした、流行以前の問題にまでさかのぼる時、服装史と言うものは、きわめて尨大な、或る意味での芸術論ともなり、人間心理学ともなり、あるいは、社会学とも経済学ともつながりながら成立してゆくものである事が考えられる。

こゝでは、そうした広い問題の中の、ごく末端的な現象にしか触れる事が出来なかつたが、機会あるごと私のノートから残された問題を逐次項目を分けて発表し、御批判を受けたいと考えております。

（本学専任講師・衣服学）